ニューヨーク通信（7）

雅楽と文化協会

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井　陽一　*Yoichi Fukui*

コロンビア大学の雅楽クラス

今年の夏、佐々木ルイーズさん（ニューヨーク天理雅楽会会長）は、コロンビア大学の雅楽クラス講師の任を終えた。雅楽クラスの開設から携わり、約14年間にわたって献身的な努力を捧げ、ニューヨークでの雅楽の浸透に大きな貢献をされた。彼女の夫をはじめ、ニューヨーク天理雅楽会も協力し、筆者も笙（しょう）指導のアシスタントとして時々お手伝いをしてきた。現在は、彼女の教え子がクラスを担当している。

コロンビア大学の雅楽クラスは、2006年にコロンビア大学中世日本研究所（バーバラ・ルーシュ所長）が中心となって開設された。授業の内容は主に3管（篳篥（ひちりき）、龍笛、笙）の一つを選び、実技を磨いていきながら打ち物、弾き物も学ぶ。各セメスターの終わりにはキャンパス内の会場で演奏会を行ない、毎年日本から、第一線で活躍している演奏家を招き、講習会や合同演奏会も開催している。夏には、雅楽夏期留学研修プログラムがあり、5月末から7月初めまでの6週間、選抜された数名の学生は日本に滞在しながら宮内庁や伶楽舎などの演奏家から集中的に指導を受け、演奏の技術も非常に上達して戻ってくる。往復の渡航費、宿泊費、稽古代などは全額大学が負担している。雅楽クラスの運営や夏期研修プログラム開催にあたり、同大学中世日本研究所では、大変苦労しながら協力金を集め、このプログラムを続けてきた。楽器や道具も少しずつ充実し、鉦鼓と太鼓以外は全て揃っている。

2012年には邦楽部門が追加され、尺八クラスでは、文化協会の音楽ディレクターでもあるジェームス・シェレファーさんが教えている。雅楽・邦楽クラスの受講生は音楽専攻者をはじめ、日本文化研究者や医学部生など多彩だ。その上、単位に関係なく、大学に繋がりのある一般の人も受講しているので、年齢層にも幅がある。また、現在はオンライン授業ということもあり、ヨーロッパやオーストラリアなどからも受講している人もいる。

作曲科や音楽専攻の学生たちは、受講しながら身につけた和楽器の実技を様々な形で発信し、雅楽や邦楽の普及に貢献している。雅楽や邦楽を取り入れた現代音楽も作曲し、発表している。文化協会でも時々彼らの新作が公演されている。

コロンビア大学のこのような試みは、今後もますます世界に影響を与えていくものと思い、文化協会としても引き続き協力していきたい楽しみな動きである。

宇宙飛行士とのコラボ演奏

ニューヨーク天理雅楽会は、1979年に結成され、ニューヨーク自然史博物館でのシルクロード展やメトロポリタン美術館、ニューヨーク・シンフォニーホールなど数々の会場で演奏会を行なってきた。

2014年に天理大学雅楽部とバイオリン奏者のウィリアム・ケンジさんと若田光一宇宙飛行士が宇宙ステーションから笙を吹き、コラボ演奏を行なったのも文化協会がきっかけとなっているので、この場をお借りして経緯を書かせていただく。

その前年の3月、東京駅100周年記念の一環で、同じく100周年を迎えたニューヨークグランドセントラル駅と姉妹駅締結式が行なわれた。その式典に雅楽演奏の依頼が文化協会に入った。ニューヨーク天理雅楽会がその式典で、「Bella Gaia」弦楽合奏団（ウィリアム・ケンジさん主宰）とコラボ演奏を行なった。「Bella Gaia」はNASAとの繋がりがあり、NASAの所有する特別な映像を映し出し演奏を行なっている。その後、ウィリアムさんが偶然に若田飛行士に会った際に、雅楽とコラボの話が出て、宇宙ステーションから若田さんが笙を演奏することになった。そして、笙の購入と演奏指導の相談が文化協会に舞い込んだ。なかなか予算内の笙がなく、天理大学の佐藤浩司先生に相談したところ、幸いにも準備してくださることになった。その結果、天理大学雅楽部もコラボに参加することになった。

写真1：コロンビア大学での練習風景

出発前、若田さんは出発地のカザフスタンのバイコヌール宇宙基地から、ウィリアムスさんと筆者は文化協会からスカイプを通して、笙の説明やレッスン、バイオリンとの演奏リハーサルを行なった。

天理大学の笙はスペースX社のドラゴン便で宇宙ステーションへ別送されることになったが、発送日がなかなか決まらず、若田さんの宇宙滞在中に間に合わない可能性も囁かれていた。しかし、コラボ予定日の直前に届き、5月3日、感動のコラボ演奏が実現した。

若田さんが使用した笙は、当初、宇宙に置いてくる予定だったが、ご好意で地球に戻され、修復後、天理大学に寄贈された。

写真2：出発前の笙の練習の様子（文化協会にて）
左から若田さん、筆者、ウィリアムさん